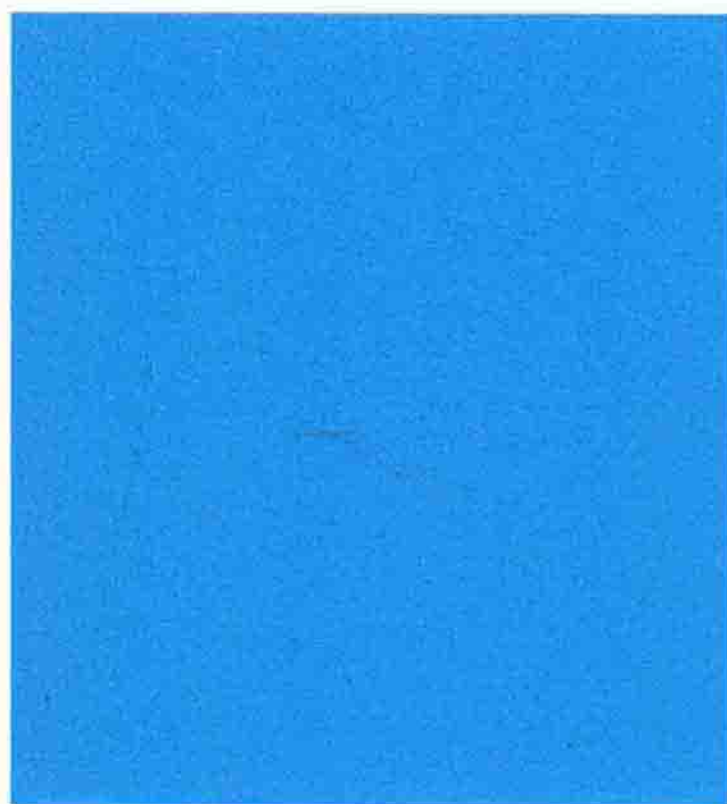


向き合う力

池上季実子



講談社現代新書

2271

向き合う力

池上季実子

講談社現代新書

2271

講談社現代新書 2271

向き合う力むきあうちから

二〇一四年七月二〇日第一刷発行

著者 池上季実子いけがみきみこ © Kimiko Ikegami 2014

発行者 鈴木哲

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目二二二 郵便番号 112-8001

電話 出版部 〇三―五三九五―三五二一

販売部 〇三―五三九五―五八一七

業務部 〇三―五三九五―三六一五

装幀者 中島英樹

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

定価はカバーに表示してあります Printed in Japan

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。〔R〕（日本複製権センター委託出版物）

複写を希望される場合は、日本複製権センター（電話〇三―三四〇一―二三八二）にご連絡ください。落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは、現代新書出版部あてにお願いいたします。



目次

はじめに

梨園のしきたりとは無縁だった／京都の自然に培われた感性／自分の存在を認めてもらえた喜び／仕事が私を成長させてくれた／三日間誰とも話していないことも／人生は「宿題」の連続

3

第一章 子供を持つことの「強み」と「弱み」

何のために私は頑張ってきたの？／仕事と子供、どっちが大事？／離婚したのは親の勝手／反抗期の試行錯誤／「いつまでも一緒」という錯覚／ペット・ロス／キッチンに立つのもつい億劫に／世の中に追いつくのが大変／すべての経験には「意味」がある

21

第二章 転機が「決意」と「覚悟」をもたらす

ドラマ撮影を見にNHKへ／人に認められなかった／人と人とのつながり／映画とテレビの違い／「笑うイス」「セツシュする」／お芝居をして生きていくという決意と覚悟／ダブルブッキングの危機／信頼できる人との出会い／森繁久彌さんから教えられた「心構え」の大切さ／水谷豊さんは今でもきさくな「お兄ちゃん」／大河ドラマ出演

51

第三章 名優に学ぶ「謙虚さ」と「気配り」

田中絹代さんの演技指導／山岡久乃さんの包容力／今井正監督の上品な執念／高倉健さんの慈愛／京マチ子さんの凛々しさ／山田五十鈴先生の風格／松田優作さんの繊細な気遣い／勇気づけられた緒形拳さんのアドバイス

83

第四章 「不慮の事故」「後遺症」と向き合う

「第六感」がはたらいた／黒い車イス／暴走馬車／寒気とけいれん／塗炭の苦しみの

103

はじまり／「自分だけは大丈夫」だと思っていた／一年間放置したツケ／周期的に現れるむくみ／当たり前前に生きられることの幸せ

第五章 女優稼業の「オモテ」と「ウラ」

派遣労働／他人の成功を妬んでいては成長できない／嫌みに気づかない鈍感力／完璧主義の反動／自分の可能性を自分で狭めない／体当たり演技／パンツぐらい私も買いますよ／相次ぐ熱愛報道／交際相手は一人？／人間不信／災い転じて福となす

第六章 「ご飯の時間が怖かった」という記憶

あやつり人形の涙／アメリカ暮らしの実際／「なんでまた肉を食べるんだ」／「おまえはどうしてそうなんだ」／あきらめるしかなかった／両親の不仲／「そろばん塾などやめてしまえ」／小学校で受けたいじめ／ささやかな抵抗／祖父が唯一の支えだった／クリスマスイヴの思い出／父との別居生活／家にいたくなかった／「しつけ」って何？／甘え下手

第七章 「おひとりさま」として生きる

結婚を決めた理由／ふたりの二日分の食事を作り置き／思いがけない暴力／離婚に導いた「負の連鎖」／土の匂いをめぐる／もう一度京都に住みたい／虎党／古美術のしあわせ／着物の魅力／コミュニケーションも伝承／おひとりさまのこれから／母親との関係改善

おわりに

向き合う力

池上季実子

講談社現代新書

2271

はじめに

梨園のしきたりとは無縁だった

私は今年五五歳。女優になって四〇年の節目の年を迎えました。最近、撮影現場に行くと共に演者やスタッフが自分より若い人ばかりになり、（ああ、やっぱり四〇年たちっちゃったんだ……）と実感しています。

一方で、これって本当に現実なのかしらと半信半疑でもあります。女優になれたことが信じられなければ、こんなにも長い間、女優を続けられたことも実感できないのです。

最近、あるネットサイトで私が「（昭和の）お嬢様女優」と紹介されているのを見て、「あっ！ まだこんなふうに思われている」と驚きました。

「ニューヨーク生まれ」「梨園の一族」という断片的な経歴から、お嬢様と呼ばれることが多かったのですが、残念ながら（？）「お嬢様」ではありません。梨園に生ま

れた女子は、歌舞伎界のしきたりで歌舞伎役者にはなれません。それでも多くの女子が芸事を一通り仕込まれ、芸人として純粹培養されて育つケースが多いです。ですから女優としてすぐに活躍できる方が多いのですが、私はそうした梨園の慣習とは無縁の環境で育ちました。

自分の本当の夢って何だったんだろうと首を傾^{かし}げてしまうことがあります。今、改めて過去のゼロ地点に戻ってルーツを見直すと、物心ついたところから一五歳でデビューするまでの足跡は、それ以後の人生とは何もかも違いすぎて、少なからずとまどつてしまうのです。

京都の自然に培われた感性

三歳から小学校を卒業するまで京都で育った私は、身のまわりの自然が大好きでした。住んでいた左京区あたりは今でこそビルが立ち並んでいます。ですが、当時は素朴で緑豊かで、生き物はバラエティに富んでいました。蝶やセミ、カブトムシなどの昆虫が好きな一方、絵画などの美術にも熱中していました。一日中、野山を駆けまわる泥ん

こまみれの自然児と、絵画の前で微動だにせずたたずむ美術マニア、まったく対照的なふたつのキャラクターが当時から今に至るまで、私の中では仲良く同居しています。

家の近くに吉田神社という、昭和のテレビドラマ『隠密剣士』や『銭形平次』のロケでよく使われた有名な神社があり、裏山はこんもりとした雑木林になっていて、そこが私の格好の遊び場になっていました。

夏になると弟とふたりでよく虫捕りをしました。八百屋さんで木製のみかん箱をもらい、上部の開いているところに網を張って、側面の一部を切ってふたとして開閉できるようにし、丈夫なひもをつけて背負っては山の中に分け入りました。昆虫が来る樹木を見分けようとしても、子供で背が低いので木の上のほうの状況はわかりません。そこで、木の幹にあるコブに注目しました。じっと見上げていて、コブに蜂が寄ってくれば樹液が出ている証拠です。そんなポイントにはクワガタやカブトムシが必ずやってくるはずなので、いさんで登りました。

いろんな種類のセミやクワガタ、カブトムシ、カミキリムシ、虹色に輝くタマム

シ、コガネムシなど、とつてきたみかん箱いっぱいの昆虫を、早朝、ラジオ体操の集いに来たみんなに見せて自慢した後、家の庭に放していました。

蝶も育てたことがあります。キャベツ畑で収穫しているおばちゃんに、「モンシロチョウの卵を集めたいから葉っぱをとらせて」と頼んで、卵のついている外側の硬い葉をたくさんいただいて育てました。アゲハチョウは、みかんやからたちの葉っぱに卵を産んでいました。そうした観賞用の樹木はご近所の家にいっぱいありましたから、卵がついている枝をいただいては、羽化するのを楽しみにしていました。

林の中の地面には全長一センチくらいの大きなアリがいました。アリが地中に巣を作る様子が見たくて、透明なプラスチックの水槽を砂でいっぱいにして、つかまえてきたアリを上から入れてみました。でも、これは失敗でした。いつまでたっても一向に巣を作ろうとしないのです。女王アリがいないと、働きアリだけでは巣はできないということを私は初めて知りました。

神社脇の小さな池には、アメリカザリガニが大量にいました。小枝の先に結んだひもにスルメをつけて垂らすと、いわゆる入れ食いで面白いように釣れました。

そんな昆虫や小動物の中でも、私には特にセミに思い入れがありました。何年もの間地中にこもって、やっと地上に出て羽化したと思ったら、一週間で死んでしまうはかない運命に子供心を揺さぶられたのです。

日本にいるセミのほとんどの種類を見分けることができました。観察していると、種類によってそれぞれ成育しやすい場所があることがわかりました。ミンミンゼミやツクツクボウシは真如堂へ通じる参道脇の桜並木に、カナカナ、クマゼミ、アブラゼミ等は、山の上のほうの森に集まっていました。アブラゼミの中には、お腹に縦横五ミリほどの正方形の角がとれた形の肌色の寄生虫がついているものがありました。一週間しか生きられないのだからせめて快適に過ごさせてあげようと、割り箸や楊枝を使い苦心してとったのち、庭に放しました。

一番印象に残っているのは、セミの幼虫が羽化する様子を観察できたことです。いつものように『銭形平次』のタイトルバックで毎回登場した吉田神社の表の石段を勢いよく駆け上がり、ふと、そばの林のほうに目をやると、まっすぐ高くそびえる杉の

木の根元に地中からはい出したばかりのセミの幼虫がいるではありませんか。これは大発見と興奮して、私は彼の羽化を見守ることにしました。セミの幼虫は木の幹にとりついて、わずかずつそろそろと登っていきます。盆地にあるため暑いことで有名な京都の夏。気温はぐんぐん上昇していたはずですが、暑さを苦痛に感じた記憶はありません。

間もなく幼虫は脱皮を始めました。背中のカラがほんの少しずつ割れてきて、（がんばれ！　がんばれ！）と心の中で声援を送っていると、背中にはつきりした白い線が見えて、中の体が少しずつ出てきました。胴体は乳白色で羽の付け根は薄いピンク、羽根全体は白い半透明ですが、薄いペパーミントグリーンの筋がたくさん入っていました。茶色い成虫しか見たことがなかった私は、カラフルな姿に目を見はりました。初めてセミのこんな姿に遭遇し、しかもごく間近で見られたのですから、これは神様がくださったすごいチャンスなんだと思っていました。おおげさに聞こえるかもしれませんが、うれしさで体が震え、自分のまわりの世界が一変して見えるような、後に娘を出産したときに匹敵するほどの深い感動でした。「これから羽ばたいていくん

だねえ……ほらっ、がんばって！」とつぶやいては、日が暮れるまで見ていました。

自然が作り出した独特の色や形、その美しさにこだわっていました。人智のとうてい及ばない自然の操作は何にも増して素晴らしいと、感嘆する日々でした。花の色や匂い、緑の多種多様な色合い、質感、地面に芽吹いたばかりのつくしやふきのとう、はこべ……。はるか遠くの山の色が四季折々に変わっていくことにも、たびたび心を奪われました。私の感性は京都の自然によって培われたと思っています。

自分の存在を認めてもらった喜び

小学生の時は図画工作が得意で、将来は美しい自然を描く画家になれたらいいな、と考えたこともありました。後述する家庭の事情で、早く独り立ちして仕事ができるようになりたいと思い始めた小学校六年のころです。でも、具体的な将来設計となると、美術館の素晴らしい絵画を見ては、自分のセンスや表現力には限界があることもわかり、画家を職業にして生活するのは難しいだろうなと子供なりに冷静に判断していました。そんな内省的な子供で人前で目立つことは苦手でしたから、畑違いもはな

はだしい女優にどうしてなれたんだろうと、今更ながら不思議に思えるのです。その背景は、やはり私のやや特殊な生い立ちにあったようです。

幼いころ、家庭においては、私は存在そのものを否定されるような扱いを受けてきました。芸事や習い事はいっさい禁止され、自ら望んで親に隠れて通い始めたそろばん塾まで、泣きながら抗議してもやめさせられてしまいました。

毎日毎日、未熟な頭でいくら努力しても、「どうしても決められたことができないんだ」「ダメなやつだ」と叱られ、平手や一メートルもある物差しで叩かれ、胸が押しつぶされるような苦しい思いをしてきました。仮にも梨園の縁戚の端くれでありながら、そんな「しつけ」を受けた事情は少々込み入っていますので、第六章でご説明します。

私には目上の方から課題を示されると、過剰なまでに責任を感じてしまう習い性があります。それは、理不尽な扱いを繰り返し受けながら、何とかして自分の一挙手一投足を受け入れてもらおうと願ってきた幼時の原体験と無縁ではないと思います。

一五歳のときに映像の世界に飛び込んだのは、まったくの偶然の出会いがきっかけ